

「断り」における日中対照研究—断られた側の意識調査から

高揚（コウ ヨウ） 筑波大学 大学院生

本稿は断る側ではなく、断られた側に焦点を据えて、依頼への断りをどのように受け取るのかについて、日中間における断り方への認識差を明らかにすることが目的である。

調査の結果、ポジティブ・ポライトネスの側面の強い断り方は中国人にとって受け入れやすい。一方、私的領域に踏み込められない場合には、日本人もそれを好むことを主張する。

1. はじめに

橋本(2006)は、「メッセージの送り手がどんなに工夫して自分の考え・感情を記号化しても、最終的にそれが理解されるのは受け手の記号解釈の結果としてである。したがってメッセージの意味を決めるのは受け手であり、送り手ではない」というメッセージの意味は受け取った側が決めることの重要性について指摘している。断りの場合、断る側の断り方は重要で、しかも今まで多く研究されていたが、断られた側の意識、つまり断りをどのように受け取るかについて言及する研究は管見の限りまだ多くない。

従って本研究は、ポジティブ・ポライトネスの側面の強い断り方とネガティブ・ポライトネスの側面の強い断り方では、日中母語話者にとってどちらの方が受け入れやすいかを明らかにするため、仮説を立てて、断られた側の視点から検証する。

2. 断られた側の意識が言及された先行研究および問題点

野木(2010)では、「断り」という発話行為を親しい間柄において日本人話者がどのように表現するかを調査した後、具体性のあまりない返答よりも、正直な気持ちを述べてくれた回答者の返答により好感を持った、という断られた側の立場にして自分に限った感想を述べていた。しかし、それはどれだけ日本人一般に当てはまるかは疑問と言える。

マスデン(2011)は、日本人大学生が留学生の断り表現に感じる失礼な表現への意識調査を行った。「用事があって…」という日本人も使う常套句には実際に多くの日本人大学生が不快と感じるという結果は意外であったと述べている。しかし、その調査結果は単に断り表現への評価に限らず、その発話者つまり留学生を意識し、日本人大学生が評価しているのではないかと考えられる。

また、小野・劉(1998)は日本人、中国人に典型的な断り表現(日:間接的、人間関係重視、受け手指向;中:直接的、送り手中心、課題指向)を取り上げ、母語話者間のこうした特徴は、相手の断り方をどう受け止めるかに影響するかを調査した結果、日・中母語話者の過半数が相手の典型的な断り方に違和感を示している。しかし、意識調査紙に用いた中国語の日本語への翻訳(中国人日本語学習者二人によって翻訳したもの)がどの程度、原文の意図を正しく反映しているのかが問われる。

以上を踏まえて本稿では、日中母語話者各 20 名を調査対象者にし、断り発話文を中国語が分かる日本人の大学院生に翻訳されて調査紙を作った。断られた側として、依頼への断りをどのように受け取るのかについて、意識調査を行うことにより仮説を検証した。

3. 仮説

滝浦(2008:46)では、「日本語は対人的な距離が大きく、ネガティブ・ポライトネスが優勢であると言える。対照的に、アメリカ(とりわけ西海岸)の英語や、現代の中国語は、対人的な距離が小さく、ポジティブ・ポライトネスが優勢である」と指摘している。この指摘を踏まえて、以下の仮説を立てて検証する。

仮説 1: 日本人はネガティブ・ポライトネスの側面の強い断り方を受け入れやすいが、ポジティブ・ポライトネスの側面の強い断り方に賛同できない。

仮説 2：中国人はポジティブ・ポライトネスの側面の強い断り方を受け入れやすいが、ネガティブ・ポライトネスの側面の強い断り方に賛同できない。

4. 研究方法

4.1 データ

予備調査で筆者が収集した親しい友人に「宿舎の引越しの手伝いを頼まれる」という場面における日本人、中国人の断り発話を意味公式から分類した。分類した意味公式の内容から見ると、依頼を断るとき日中間で最も異なるところは、日本人の自分は回避する内容の{代案}に対し、中国人は「代わりに私が他の人に連絡するのはどう」のような相手の意志に関わる私的領域に踏み込み、積極的に自分から何かしてあげようとする内容の{代案}を提示した。また、日本人は「別の日」を{条件}にするのに対し、中国人は積極的に「依頼された日の用事が終わる」を{条件}にした。この{代案}と{条件}の意味公式の内容から反映された断りにおける正反対なポライトネスの示し方や対人関係の有様により、日中間で互いの断り方に賛同できないではないかと思われる。

4.2 調査方法

2017年5月に、日本人20人(男:女=4:16;年齢(平均):30.95歳)と中国人20人(男:女=8:12;年齢(平均):29.85歳)を対象にアンケート調査を行った。「宿舎の引越しの手伝いを依頼する」という場面を設定し、親しい友人にそれを断られた際の発話を受け入れやすさの順位で断り表現を選んで、その理由を書くように指示した。

5. 結果

中国人はポジティブ・ポライトネスの側面の強い断り方を好んで、しかもその選択の一致率が高かった(90%)。反対に、日本人が好んでいる断り方は個々人によってかなり違うし、時として正反対になった(ポジティブ・ポライトネスの側面の強い断り方を最も好ましい回答とそれを最も受け入れ難い回答として選択した人の比率は2:3であった)。

本研究の結果、仮説2が検証できた。中国人にとって受け入れやすい断り方は、{理由}がはっきりと説明されていて手伝えない真実性が感じられ、積極的に{代案}や{条件}を提示し、手伝いたい誠意が感じられるポジティブ・ポライトネスの側面の強い表現である。

一方、仮説1は検証できなかった。本研究の調査結果から、依頼を断られた際、日本人は相手の誠意に加え、私的領域を重視していることが分かった。私的領域に踏み込めない場合には、日本人はポジティブ・ポライトネスの側面の強い断り方を好んでいる。しかし、私的領域に踏み込められると、その{代案}などはやりすぎる、くどくと感じる人がいる。また、その親切に悪い気持ちは全くないが、相手には予定を狂わせてしまう可能性があることに配慮し、申し訳ないと感じてかえって負担に感じる人は多く、ネガティブ・ポライトネスの側面の強い断り方を好む。

主な参考文献

- 小野由美子・劉玉琴(1998)「異文化間のミスコミュニケーションに関する一考察—日・中母語話者の断り表現をめぐって」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』13, 105-113, 鳴門教育大学
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社
- 野木園子(2010)「日本人の断り表現とラポールマネジメントに関する一考察」『二松学舎大学論集』53, 97-109, 二松学舎大学文学部
- 橋本満弘(2006)「遠心的活動としてのコミュニケーション」橋本満弘・畠山均・丸山真純編『教養としてのコミュニケーション』52-87, 北樹出版.
- マスデン真理子(2011)「日本人大学生が失礼だと感じる留学生の誘い・断りの表現に関する予備調査」『熊本大学国際化推進センター紀要』2, 51-73, 熊本大学